

3-8. ようこそ鋸南プロジェクト（千葉県安房郡鋸南町）

(1) 地域の概要

【人口】

8,673人（平成26年4月時点）

【地勢】

鋸南町は千葉県の南、房総半島の西南、安房地域にあり、北は富津市、東は鴨川市、南は南房総市に接し、西は東京湾に面している。都心から65kmに位置し、風光明媚な海

岸線を有し、また海岸より山間部にかけては低山ながらも豊かな山系を有し、北部には標高329mの鋸山がある。中央部以東は狭い山間地帯で、中央部以西は海岸に向かって平坦地となり、最西端に市街地が展開している。公共交通機関としては、JR内房線と、国道127号線や館山自動車道が南北に走り、生活幹線となっている。

【面積】

45.16㎡ 東西10.75km・南北 7.30km

【気候、自然】

年間平均気温は18.1℃（平成25年平均）、冬季（12～2月）平均気温は8.4℃で、昔から「鋸山を越えると肌着が一枚いらぬ」と言われる温暖な気候。温暖な海洋性気候と風光明媚な海岸線は古くから海水浴場として栄えてきた。北部には、名刹日本寺や日本一大きな石仏を有す標高329mの鋸山があり、また冬季は町内のいたるところで水仙の芳香が漂う。

【歴史】

縄文・弥生時代	紀元前200年頃	田子の台遺跡	田子の台遺跡には現在竪穴式住居が復元されている。
古墳時代	大和時代300年頃	浮島	伝説の島として景行天皇が浮島に行幸の際、磐六鹿命が魚介を調理して献上したという伝説が残る。
奈良時代	725年	日本寺	鋸山に日本寺が建設される。海中より出現したと伝えられる梵鐘がある（国指定重要文化財）。
平安時代	1180年	源頼朝上陸地	石橋山の合戦に敗れた頼朝は三浦半島から逃れ、勝山海岸に上陸。兵をたてなおし、12年後に鎌倉幕府を築きあげる。上陸地には記念碑が建立されている。
	1181年	日本寺	源頼朝日本寺復興。
鎌倉時代	1253年	妙本寺	妙本寺の日蓮愛染不動感見記は、日蓮が開宗した翌年に描いたとされる書。初期の筆跡として大変貴重なもの（国指定重要文化財）。
南北朝時代	1333年	日本寺	日本寺兵火にかかる。
	1335年	妙本寺	日郷上人妙本寺を開く。
江戸時代	1630年	捕鯨	近代捕鯨の祖、醍醐新兵衛定明（初代）が生まれる。

	1704年	捕鯨	近代捕鯨の祖、醍醐新兵衛定明（初代）没。このころまでに鯨突組を確立。
	1779年	安房の名工	安房の名工（石彫り）武田石翁が生まれる。
	1806年	勝山藩	小林一茶、勝山藩に駐留する。
	1845年	捕鯨	英国捕鯨船が勝山沖に停泊する。

【観光・地域資源の概要】

年間観光客数 83 万人（平成 25 年調査調査地総計）

鋸山・日本寺

名刹日本寺や日本一大きな石仏を有す標高 329m の鋸山は、富津市・金谷よりロープウェイでもアクセスできる南房総有数の観光地

水仙 日本三大水仙生産地

海水浴場 房総海水浴発祥地

ばんや 年間 40 万人が訪れる漁協直営の飲食店

菱川師宣記念館 「見返り美人」で有名な浮世絵の創作者菱川師宣の誕生の地

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 背景

千葉県安房郡鋸南町は鋸山の南に位置し、東京湾に面するとともに、町の総面積 2,325ha の約 3/4 を農林地面積が占める自然資源が豊かな町。また、農業従事者が町の全就業者数の 16% に達するなど、農林漁業が町にとって重要な産業となっている。さらに、江戸時代から菜花や水仙の有力な生産地であったことから、特に年末～夏にかけて、水仙、菜花、頼朝桜（河津桜）、アジサイ、スターチスなどが町内の至る所で見られ、これら花の観賞のために町内を訪れる方は年間約 10 万人に上る。一方で、近年の定住人口の減少（直近値で 9,000 名弱）、高齢化の進展（高齢化率約 40%）、農業従事者の減少（直近約 600 戸余）が進んでいます。併せて少子化も進展しており、かつて 3 校あった町内の小学校が廃校により 1 校に集約されるなど、地域活力の減退、地域コミュニティの核の喪失、農業の担い手不足と耕作放棄地の増加などが懸念されている。

2) 地域課題

2012 年度より「農山漁村活性化プロジェクト交付金」等を活用し、廃校利用による都市交流施設の整備、およびその周辺環境の整備を町で進めている。都市交流施設を核とし、併せて施設周辺に広がる豊かな自然環境を体感してもらうことで、首都圏や海外からの集客を促進することを検討している。

既に町内では、町民からなる各種団体が、ハイキング、ポールウォーキングなどエコツーリズムの概念に近いプログラムや、町外からの農業体験の受け入れ活動などを実施中。

しかし、それぞれの活動が十分に連携しておらず、また町全体で共有すべき自然

環境の保全・活用の理念や方針なども十分に想定・共有されているとはいえない状況。

3) 申請目的

上記の課題を解決するため、エコツーリズム推進アドバイザー派遣を利用させていただき、エコツーリズム推進に当たっての資源の発掘、取組体制の構築、組織の立ち上げ、新たなプログラム開発等を行いたいと考え申請した。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 27 年 1 月 27 日 (火) ～29 日 (木)
場	所	千葉県安房郡鋸南町
アドバイザー		観光・地域づくり研究員 緒川 弘孝 氏
参加者		合計 14 名
スケジュール・方法		<p>【1日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視察：海岸線側、水仙ロード、菜の花圃場 ・鋸山ガイドツアー体験、菱川師宣記念館見学 <p>【2日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウォーキングイベント企画者ヒアリング ・視察：佐久間ダム、をくづれ水仙郷等 ・農業体験実施団体圃場視察・ヒアリング ・講義：「エコツーリズムによる地域振興のあり方」 <p>【3日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ばんや定置網漁体験視察 ・クロススポーツコース視察・ヒアリング ・ワークショップ：お宝マップ、季節暦作成

(4) アドバイスの内容

<講義>「エコツーリズムによる地域振興のあり方」(鋸南町中央公民館)

1) 講義内容

エコツアーとは、自然と文化を楽しんでもらい、それらを守る気持ちを育み、地域のために対価を支払ってもらうことというのが前提であり、特別な自然でなくとも地域を知った人だからできる説明の仕方によって「地域の宝」となること学ぶ。(参考:ニュージーランド・マオリの暗闇の中で動物の気配を感じるナイトツアー。森に祈りをささげる行為だけで、知識ではない深い畏敬の念を感じることができる。)

日本で参考になる事例としては、当町で進めている廃校利用の宿泊を既に実施している南アルプス生態邑がお勧め(その他は日本エコツーリズム協会のウェブサイトで検索できる。)

エコツアーを実施するメリットは、滞在時間が長くなることで、感動も深くなり、

ファンを作ることに繋がることである。

但し、どのように展開するかの前に、なぜエコツアーに取り組むのかを考えることが必要である。

エコツアーを実施することで、減少を続けている人口が増加に転じる程の働き口にするのは困難であるが、地域の自然と文化を守る気持ちを持った人が住み続けられる町とすることの助けとなるのではないか。

お客さんが水仙を見に来る本当の目的は、気持ち良い自然、家族等と過ごす時間を楽しむためであり、そのようなニーズに合った観光を作ることが必要。

また、日帰り誘致圏としては有利だが競合も多く、1泊ならほぼ全国がライバルとなるため、五感を使った本物の体験で訴求する。

質疑

Q:どのように地域の資源を拾い上げれば良いか。

A:外部から来た人の目線で探してもらい、モデルコースを作成してモニターツアーを実施することで、お客さんの反応を見る。

Q:エコツアーは誰が始めて行けば良いのか。

A:意欲を持った人が行動しないと立ち上がらない。

Q:ある町で実施できていることでも、同じような条件の隣町で実施できないのはなぜか。

A:これも意欲を持った人が居ればできる。一番の地域の宝は人である。

Q:今回視察頂いた感想は。

A:ボランティア精神で頑張っていらっしゃる方が多く、それは素晴らしいことだが、ガイド料や参加費などを頂けるように工夫できると、地域に少しでも経済効果が生まれ、後に続こうという人もできる。

Q:地域にお金が落ちるには、どのような工夫が考えられるか。

A:質が高いエコツアーをつくりつつ、食事や宿泊とのセットメニューにすることを考える必要がある。一方で、同様のツアーをダンピング価格でやらないことも必要となる。

2) <ワークショップ>「お宝マップ」・「季節暦」の作成（中央公民館）

鋸南町にある「地域の宝」を探するための方法として、地図にそれぞれが良いと思う場所を張り付けていく「お宝マップ」と、月毎の花、食べ物、祭・イベント等を記載する「季節暦」を作成するワークショップを実施した。

今後、異なる参加者も交えて、発展的に実施することで、エコツーリズムの題材となりうる「地域の宝」を発見、さらには連携することで付加価値を生み出すことができることを認識した。



お宝マップ作成

3) <視察>

①鋸山ガイドツアー体験視察

現在町で実施中の有料ボランティアガイドのガイドツアープログラムで、鋸山・日本寺エリアの案内を体験視察して頂いた。

コースは、鋸山ロープウェイを使い山頂展望台へ、そこで景色と石切場であった鋸山の歴史や地質を説明。その後、日本寺境内にある、百尺観音、地獄覗き、千五百羅漢、大仏、本殿エリア、そして下山後、土木遺産に認定されている石造橋「汐止橋」の案内を含め、2時間の視察を終了した。

講師より、ガイドをする上で心がけているポイントや、外国人案内時の対応方法等についてヒアリングを行いつつ行程を進めた。

②ウォーキングイベント企画者ヒアリング・体験視察（保田川沿い）

町で実施している味わいハイキングの企画、案内人に、企画実施の経緯や、現在の取組内容、注意点等についてヒアリングを行い、その後河津桜（頼朝桜）の花がほころび始めた保田川沿いウォーキングを体験視察した。

③農業体験実施団体代表者ヒアリング・圃場視察（佐久間地区）

現在農業体験を受け入れている2団体（AK アグリ、佐久間アグリサポート）の代表者へ受け入れ方法や対応方法についてヒアリングし、活動を実施している圃場も視察した。

④ 鋸南クロススポーツクラブ担当者ヒアリング・コース視察（嶺岡林道）

町内で「きよなん頼朝桜リレーマラソン」、「きよなんヒルズマラソン」、「きよなんアクアスロン+オーシャンスイム大会」、「鋸南アドベンチャーフェスタ トレイルランレース」等を実施するスポーツイベント企画団体に活動についてヒアリングを行い、その後「きよなんヒルズマラソン」のコースである嶺岡林道を視察した。

⑤ 町内視察・菱川師宣記念館・ばんや定置網漁視察

海岸エリアは、市町境の北端・明鐘崎から保田、勝山地区の海岸を経て南端・岩井袋と隣町岩井海岸に至る海岸線、里山エリアは「江月水仙ロード」と町特産品である菜花の圃場見学、みかん畑、佐久間ダム、「をくづれ水仙郷」等をご案内し、当町が海と山との両方が近接した町であることを実感頂いた。

町内出身の浮世絵画家、菱川師宣の作品を始めとした浮世絵の博物館である菱川師宣記念館を見学。

漁協が実施している定置網漁見学プログラムを視察した。

(5) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

① エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

エコツーリズムとは何かについて、講演後全参加者が理解の深まりを実感する結果となった。

② 今まで課題としていたことがより明確になった

当町の取組はまだ胎動期であることから、何が課題であるのかの認識も関係者間で共有できていなかったが、まずは無理にエコツーリズムを推進することが必要なわけではないこと、またエコツアーガイドの素質を持った方を探すことが課題であることを確認できた。

③ 今までの課題に対して取組方が分かった

エコツアーガイドの素質を持った方の中でも、特に意欲の強い方を中心に、ガイド講習への参加や他地域事例の視察をしてもらうことが最初に取り組むべき課題だと分かった。

④ 今までとは別の課題が明らかになった

エコツーリズムに繋がる可能性のある既存の活動であっても、活動の目的や意欲によって、エコツーリズムとして成立可否に違いがあることが認識できた。そのため、そもそもエコツアーを推進するかどうか、推進するとすればどのように関係者及び住民の機運を高めて行くのかについても、今後検討を要することが明らかになった。

2) 今後期待される効果

今回の視察を通じ、現在エコツアーになりうる活動を行っている関係者の中から、エコツアーガイドの素質を持った関係者と接触できたため、今後研修や他地域事例の視察のサポートを行い、その上で当町においてエコツーリズムをどのように進めるかの検討素地の形成が期待される。

3) 今後の取組

来年度は今回参加者や関係者が参加する、ガイド講習や他地域事例視察のサポートを検討して行きたい。その上で、当町に合った形のエコツアーとはどのようなものかを検討するスタートの年としたい。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

南アルプス生態邑

エコツアーとともに、小学校を改装した宿泊施設がある参考事例。

2) その他感想

緒川講師が強調されていたのは、エコツーリズムを展開するための手法ではなく、地域に合ったエコツーリズムについて、関係者が目的意識を共有することの重要性であった。更には、今あるものを活用するという供給者の視点では無く、お客様の目線で考えるという点についても、説明の仕方を変えながら強調されていた。今後、当町での取組を検討する上で、この2点を基本指針として大切にしていきたいと考えている。

【記録写真】



打合せ



鋸山視察



町内視察



定置網漁体験視察

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

観光・地域づくり研究員 緒川 弘孝 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

千葉県鋸南町では、現在のところ、エコツーリズムへの取組を行ってはいませんが、地元グループにより開催されている「鋸南町味わいハイキング」では、町内外の歴史、文化、自然をとこところで解説しながら歩くイベントが毎月 1 回程度のペースで、昨年まで 116 回実施されている。また、町内を案内するボランティアガイドが鋸南町地域振興課に登録されており、鋸南町随一の名所である鋸山・日本寺を中心にガイドをしている。

鋸南町は、足立区の福利厚生施設やスポーツ施設が立地し、生徒・児童の合宿も多いところから、一部の農家が農業体験に対応している。

鋸南町には、総合型地域スポーツクラブである「鋸南スポーツクラブ」があり、アクアスロン（水泳と長距離走の競技）やトレイルランなど、自然環境を活かしたスポーツイベントを開催している。

地元の保田漁協では、定置網漁の見学や遊覧船の事業を実施している。

鋸南町は、江戸時代から続く水仙の名産地であり、水仙の畑と一体的に道路沿いなどに水仙を植えた二つのエリア（江月地区水仙ロード、佐久間ダム周辺）を中心に、シーズンには水仙が咲き誇る名所となっており、多くの来訪客がある。

②課題

地域でのエコツーリズムへの取組は、まだこれからであり、まずは、エコツアーガイドをはじめとしたエコツーリズムの担い手探しが、最初にして最大の課題となる。

エコツアーのガイドの担い手としては、現在、ボランティアガイド、鋸南町味わいハイキング、農業体験などを実施しているガイド・インストラクターが、その候補となり得るが、いずれもボランティア的な料金設定のもと、ガイドをしており、現状以上の収入を求める意向は少なく、社会貢献の一つとして考えておられるようである。

しかし、エコツーリズムを持続させ、地域に根付くものとするためには、ツアー料金は有料とし、ある程度ガイドに収入が発生する料金設定とする必要がある。まず、地元経済に貢献するというエコツーリズムの重要な使命、後継者の担い手の確保、プロ意識の醸成、エコツアーとしての質の確保などについて理解してもらうことや、前述の候補の方々以外からもガイドを探すことが課題となる。

また、地域のエコツーリズム推進の中核となるコーディネーターや窓口の機能を果たす組織が必要となる。本事業の申請者となった「ようこそ鋸南プロジェクト」が、その第一の候補となると思われるが、現状でも多くの事業やプロジェクト

トを抱えており、新たにエコツーリズムに取り組むためには、持続的な財源や人材の確保が課題となる。

こうした課題の解決には、まず町民や鋸南町役場など地域全体で、エコツーリズム推進の意義について理解を広げ、深め、取組への気運を高め、支持を得ることも必要となってくるであろう。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①東京近郊では、いち早く訪れる春

本事業のワークショップで、季節暦（フェノロジーカレンダー）を作成したところ、既に町の観光資源となっている頼朝桜（河津桜）が、他の桜に先駆けて2月に満開となるだけでなく、1月から水仙、菜の花、梅が咲き、他の地域に比べ、いち早く花のシーズンが開幕することが分かった。

一般的な観光地では、冬の時期に見所がなく、集客の谷間となっている冬の時期に、鋸南町では観光客のピークの一つが来るということは、ユニークである。現在は、ほぼ頼朝桜と水仙だけをPRして観光提供し、一部、菜花の摘み取りを農業体験として提供しているが、他の花や植物などでも、地味ながら春の訪れを感じる自然のものは沢山あると思われる。

寒い冬の時期を過ごしていると、「いち早く春を感じたい」という気持ちになってくる。一足早い水仙や桜を見るだけでなく、春を感じるものを食べたり飲んだりし、植物の芽や鳥の鳴き声から春の兆しを教えてもらい、地域の春の伝統行事や生活文化を知る。そうした「一足早い春」を探すエコツアーは人気を集める可能性がある。

関東周辺での「一足早い春」が来るライバルとしては、河津桜や下田・爪木崎の水仙まつりなどがあるが、春をまとめたパッケージとすれば、十分な差別化が可能である。

②「をくづれ水仙郷」の田園風景

佐久間ダムから少し坂を上ったところに位置する「をくづれ水仙郷」は、佐久間ダム周辺よりも先行して、水仙が植栽され、観光客が訪れるようになった場所であるが、現在、多くの観光客は佐久間ダムの池周辺を巡るだけのようである。

しかし、ここから水仙のお花畑と夏みかんの木と田園が広がる様子を見下ろす風景は非常に趣があり、これも鋸南町ならではのユニークな魅力である。

をくづれ水仙郷をはじめ、鋸南町の水仙の名所を訪れる観光客は、今のところ、ただ水仙を見て帰るだけになっており、物足りなさを感じさせる様子である。自分が観光客となった立場となってみれば、をくづれ水仙郷のような場所で、一休みして、お茶を飲みたいところである（そのような場所の確保と寒さ対策が必要ではあるが）。

エコツアーとするならば、水仙の花が咲く道を歩きながら、江戸時代から続く鋸南の水仙の歴史やエピソードなどを聞き、ところどころで、地元の人が教えるとおきの絶景のポイントで、しばし佇み、そのうち一ヶ所では、腰を下ろして一休みをし、温かいお茶を飲み、地元ならではの菓子を食べながら、田園風景を眺め、のんびりとした時間を過ごして、春の訪れを感じる、というような組み立てが考えられるだろう。

③移住者の暮らし

今回、視察することはできなかったが、町内には、多くの移住者がおり、ログハウスを建てたり、自然食にこだわったりと、思い思いに里山や里海を楽しんでいるようである。

そうした移住者は、地元の人たちよりも、地域の自然や文化に関心が高く、知識もあり、楽しみ方も知っている可能性がある。都会暮らしの人にとっても、そうした人たちのくらしは、興味深く、魅力的である。町内には、自然の風景を活かしたレストランや喫茶店もあり、エコツアーと組み合わせた休憩や食事のスポットとして連携すると、魅力を増幅する相乗効果も期待できる。

④鋸山日本寺

千三百年の歴史がある鋸山日本寺は、現在も、多くの観光客を集める鋸南町随一の観光地であり、鋸山の山頂からの絶景をはじめとして、切り立った崖に彫られた百尺観音、座像としては日本一の大きさを誇る大仏、おびただしい数の石仏群からなる東海千五百羅漢など、見所は沢山ある。

しかし、多くの観光客はロープウェイや有料道路などで山頂近くまで来て、歩いてすぐに山頂に到着するため、期待感の積み重ね方が不十分であり、絶景への感動や、垂直に切り立つ崖に挟まれて神秘的な雰囲気を持つ百尺観音などに対する驚きが、薄いのではないかと思われる。

麓から徒歩で山頂まで登ってくれば、そうした期待感が高まって来る。その山道沿いの自然や文物にも面白いものがあるとのことで、それらを解説しながら、時間をかけてワクワク感をつのらせ、山頂での感動を高める。帰りには絶景を眺めながら「呑海楼」でお茶を頂き、お客様に「来てよかった」と思ってもらえるように、お客様の旅の時間を組み立て、演出するのも、エコツアーならではの役割である。

外国人観光客に対しても、魅力となり得る場所ではあるが、タイやスリランカなどの仏教国などでは、きらびやかな仏像が一般的である。地味な印象がある日本の仏像については、その価値や文化的背景などについて、エコツアーなどで丁寧に解説することが、今後、人気を集める鍵となるかもしれない。

⑤海と漁業

富士山を望み、コンクリート護岸ではなく、砂浜や岩場などの海岸線が広がる美しい景色が、東京近郊で楽しめるのは、鋸南の魅力である。さらにそこから、海の生物観察や料理体験、漁業体験などのエコツアーに展開していけば、その魅力も膨らんでいく。

現在も、地元の保田漁協が、定置網漁見学や遊覧船などの事業を行っており、漁師や漁師OBと連携したエコツアーづくりの可能性も見える。

⑥スポーツ環境

鋸南町には、勝山サッカーフィールド、岩井袋運動場（野球場）、サンセットブリーズ保田（フットサル、スカッシュコート）、B&G 海洋センター（体育館、プール）、町営弓道場など、各種スポーツ施設が充実し、総合型地域スポーツクラブである一般社団法人鋸南クロススポーツクラブでは、スポーツスクール事業やスポーツイベント事業を実施している。

こうした鋸南町のハード・ソフト両面での充実したスポーツ環境を求めて、多くのスポーツ合宿が行われているが、小中学生などの合宿では、スポーツの練習だけでなく、農業体験などを組み合わせるニーズがある。もし鋸南町でエコツアーを提供できれば、それを利用したいという潜在的ニーズは少なからずあると思われる。

⑦農業体験

前述のように、現在でもスポーツ合宿を行う子供たちに対して農業体験を提供する農家があるが、まだ小規模に留まっている。一方で、東京都民にとっては、1時間半で来て本格的な農業体験ができる便利な場所でもあり、農業体験への潜在的なニーズは大きいと思われる。町内には、多くの耕作放棄地があり、かつ今後さらに増加していくことが見込まれ、そうした潜在的なニーズにも応えられる余地はある。課題は、担い手である。

3) アドバイス（講義等）の概要

①講演

講演では、まず日本各地やニュージーランド各地のエコツアーの事例を紹介し、エコツアーとはどういうものを説明した。ただし、今後、エコツアーを提供するためには、まず自らがエコツアーに参加してみることが必要であるため、関東周辺でのエコツアーを紹介した。特に、鋸南町で整備予定の新しい道の駅は、小学校を改装した宿泊拠点となり、エコツアーの拠点ともなる可能性もあるため、同様の例である山梨県早川町の南アルプス生態邑（ヘルシー美里）への視察を提案した。

「エコツーリズムとは何か」を、その歴史的経緯から説明するとともに、エコ

ツーリズムは三要素（観光、環境保全、地域貢献）からなり、いずれも欠くことができないことを強調した。

エコツーリズムを地域で推進する場合、手っ取り早くノウハウから入るのではなく、まずエコツーリズムの目的と目標をしっかりと地域自らが考えて、設定し、共有することが重要であることを強調した。また、日本と鋸南町の人口推計のグラフを提示し、今後も避けられない人口減少傾向の中、エコツーリズムに過大な期待をするのではなく、実現可能な目的を設定する必要性を説明した。

エコツアーづくりの基本となる考え方は、ただ「地域にこれがあるから売る」というような自分たちの都合を優先するのではなく、お客様が誰かを考え、その「お客様が買いたいものを売る」というように、お客様の気持ちになって考える“お客様目線”へと、発想を逆転させることが必要であることを示した。

エコツアーの要となるエコツアーガイドは、「地域の宝」と「お客様」をつなぐために、地域の宝を探し出し、解釈し、演出し、加工して、お客様が理解して楽しめるようにする役割であることを説明した。さらに、エコツアーづくりで必要な視点は、「お客様に伝えたいことは何か？」「お客様に楽しんでもらいたいことは何か？」であるとして、そのポイントを示した。

②意見交換

講演後に、質疑応答を交えつつ意見交換を行った。以下に、そのポイントを挙げる。

- ・地元の人が気付きにくい地域の宝探しは、ようこそ鋸南プロジェクトのスタッフをはじめとした外部から来た人たちが、誉めたり、感動や感銘を受けた様子を示すことがコツの一つである。
- ・「エコツーリズムは誰がやるのか？」という問いは、地域に住む人たち自身が選択するものであり、強制することもできないものであり、「やりたい」という人がやるしかない。
- ・エコツアーガイドの主な三条件は、①ガイドしようとする分野に興味があり好きなこと、②お客様が楽しめるように対応できること、③やり続ける熱意があることであり、このうち三つとも満たすことが理想であり、少なくとも二つは満たす必要がある。
- ・ガイドに決まった型はなく、上記の三条件さえ満たせば、個性はむしろ大事にすべきものであり、話す内容やガイドの方法に何らかの規定を設ける必要はない。
- ・ボランティアでは長続きしないし、後に続く人が出にくくなる。ダンピングにならないように、有料である程度の価格以上とすべきである。
- ・味わいハイキングなど、既存のツアー的なプログラムは、ボランティア・ベースであり、料金を引き上げてエコツアーにするのは難しいと思われる。無理に

統一する必要もなく、有料のエコツアーとはターゲットやコンセプトが違うものとして、併存させた方が良い。

- ・エコツーリズムを推進していくには、地域全体が参画しなくても、熱心な中心メンバーが4、5人いれば良い。成功例ができれば、自然と自分もやりたいという参画者が増えて来る。

③ワークショップ

エコツアーのテーマやネタとなる地域の宝を掘り起し、地域で共有するための道具として、お宝マップとフェノロジーカレンダー（季節暦）をつくる作業をした。

世代も出身もバラバラな参加者からは、それぞれ提供する情報の種類に違いがあり、驚きもあったようだ。また、これまでの観光マップには載っていない、自分が好きな絶景スポットや風景、魅力的なお店、映画のロケ地なども、お宝になり得るという新たな切り口も、アドバイスした。

また、エコツアーの開発シートを用いて、参加者一人ずつ、エコツアーの企画を考えてもらい、真っ暗闇になる環境を活かした星空観察、カッコイ漁師（漁師萌え）、安房勝山藩の歴史と食など、ユニークなテーマの企画が試作された。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

エコツーリズムに取組もうとし始めたところで、エコツーリズムやエコツアーについて、まだ取り掛かっていない段階で、「全体構想」について、実質的な検討をすることは難しいが、法的根拠に基づく地域資源の保護措置や立ち入り制限が必要な場所は、特に存在しないと思われる。

環境省を通じた広報や特定事業者によるツアー参加者の送迎についても、まだエコツアーの開発も行っておらず、担い手も固まっていない段階では、必要な状況にはないと考えられる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

私は東京に長年住みながら、東京から1時間半という近い場所に、このように海と山の豊かな自然と美しい景色に恵まれた鋸南町があることを、今回の訪問で初めて知り、大いに驚いた。特に、海岸線から東京湾の対岸を望めば、海の向こうに富士山が浮かび上がる風景は、強く心に残るもので、日本が誇るべき風景の一つかもしれない。

しかし、この東京という巨大都市から便利すぎる交通アクセスは、両刃の剣であり、来訪者のほとんどが、短時間の「見るだけの観光」で帰宅してしまう。これでは、地元で観光事業をいくら頑張っても、地域にお金があまり落ちず、エコツーリズムの三要件の一つである「地域への貢献」が満たされない。

一方で、水仙まつりや頼朝桜、各種スポーツイベントをはじめとした様々な観光や交流の事業の関係者やボランティアガイドなど地元の皆さんは、自分のことは度外視して、ただお客様に喜んでもらおう、地域に貢献しようという無私ので精神で奉仕されている。そのもてなしの精神には感銘を受けた。

しかし、ボランティア精神だけでは、参画する人の範囲に限られるし、特定の人たちだけの熱意では、後に続こうという人が出て来にくい。地域の持続可能性を考えると、どうしても地域の人々が暮らしていくのに必要なお金の話は避けて通れない。お金を頂いてサービスすることで、観光は「産業」になる。産業であれば、それにたずさわり、収入を得ることで、地域に留まって生活しようという人も出て来る。ボランティア精神だけで観光をやると、どうしてもそういう可能性が伸びてこない。

都市からのお客様をもてなし、喜んでもらうことが地域の方々の生きがいとなることは間違いない。しかし、観光事業の目的が、それだけになってしまわないように、十分、注意する必要がある。自分たちがもてなす方として楽しむだけでなく、お客様にも「ありがた迷惑」ではなく、心から楽しんでもらう。そして、それに対して正当な報酬を頂き、自分や地域の人たちに少しでも経済的な効果を生じさせるようにして、次世代へつなぐ。そうしたポイントを常に念頭に置きながら、担い手づくり、エコツアーづくりをすれば、鋸南町のエコツーリズムの可能性は大きく開けて来ると確信する。